

『桜』 歌の系譜 — 古今集から後拾遺集へ

金子紀子

一 はじめに

古代から「桜」を詠んだ歌は、非常に多い。咲くを待つ歌から始まって、盛り、散り初め、散ってしまった後、と移り変わる桜の諸相の瞬間瞬間をとらえて詠む歌は、勅撰集春部の大きな歌群をなしている。たとえば、秋の女郎花、萩、菊、紅葉などもまとまった歌群をなしているが、いずれも景物そのものを詠うものにすぎない。一方、春の花の歌としては「梅」があるが、梅はその色や芳香により賞美され、万葉集以来詠歌数も多いが、この場合にして「咲くを待つ」から「散るを惜しむ」までの時間のなかの思いを詠うものではない。桜のような詠われ方をして「歌材」（植物）は他にはみられない。

桜が日本人に長く詠われ続けてきた所以は、桜の場合「咲くのを待つ」「咲く」そして「散る」まで、花盛りの姿のみならず、散り落ちた花びらまでが美の対象となっているからではないだろうか。特に、散る桜である。桜はしおれて落下するのではなく、咲いた花びらがそのまま散つてゆく。その散りざまもまた吹雪に喻えられるくらいに美しく、散り積もった花びらも雪に見立てられている。この「散る」だけで、咲いた桜を詠むものと同じくらいの歌が詠まれている。これは他の花を歌材とした歌にも見られない大きな特徴である。桜は、咲き初める時から散り落ちるまで、短い期間にいわばかなりドラマティックにその姿を変えてゆく。桜を賞美し、愛惜する人間は、「桜」の変化に

ドラマ
物語を感じて、「桜」の中に自己を投影し、歌を詠む。毎年繰り返されることであるが、世の中に桜がなくならな
かぎり、「桜」のなかに我が心を、人の命を見るまなざしは続き、時を越えて「桜」は詠い継がれてゆく。

このような「桜」を素材とした歌を、複数の歌集のなかに追うことで、人が歌を詠むこと、歌の中で見つめられる
心の推移を理解し、そのことによって和歌史の一面を明らかにすることができるのではないだろうか。本稿ではこう
した見通しのもと、勅撰集の中から『古今和歌集』『後撰和歌集』『拾遺和歌集』『後拾遺和歌集』を選び、それぞれ
「桜」および「花」を詠み込んだ歌を抽出し、詠風の変化を分析、考察する。

本文は各集とも、「新日本古典文学大系」（岩波書店刊）を使用する。なお、紙数の関係により以下の本文につい
ては、次のように略称で表記する。

* 「新日本古典文学大系」↓ 新大系 「新編日本古典文学大系」（小学館）↓ 新全集

* 各勅撰集 ↓ 古今集、後撰集、拾遺集、後拾遺集（引用論文の中の表記はそのまま）

* 数字は新大系の各集にふられた番号を示す。

* 歌材としての桜、花は「桜」「花」とカッコを付け、自然の桜をいう場合はつけない。

さて、古今集の巻第一春歌上の49〜68番に咲く桜歌群、巻第二春歌下は69〜89番に散る桜歌群がまずある。この
「桜」四十一首については、詞書又は歌の中に「桜」の語がふくまれており、明確な「桜」の歌群である。この後に
続く91〜118番の詞書にも歌にも「花」とのみ詠まれている歌群、咲く「花」十四首、散る「花」十五首が存在する。
このあとは藤、山吹と具体的に花の名を詠みこんでいる歌となり、弥生つごもりに至る。

新大系では、明確に「桜」歌群と「花」歌群は分け、「花」を「桜」とは解釈していない。一方、新全集ではこの

「花」歌群も「桜」に関する歌としてとらえ、「桜」の歌七十首と解釈している。このことに関しては、注釈書の立場(注1)も一様ではないが、本稿では後述するような「桜」の典型的な詠まれ方(歌材との組み合わせ)によった「花」については「桜」の二類とみなし、「桜」歌と考えあわせて検討したい。

また、後撰集は周知のとおり、集全体として処々問題があり、この中で、部立てと配列の乱れ、すなわち主題の分散が見られ、古今集の緻密な配列から見るとあたかも混乱しているように見える。このことについても諸研究(注2)があり、ある程度法則性を見出し、立証する論が展開されているが、主に「梅」までであって「桜」については論究されてない。もっとも「桜」にしても、春中の咲いている「桜」から春下132番の「何時の間に散りはてぬ桜花」まで、一とおりの「桜」の諸相が詠まれている。問題は間にいろいろな景物を詠んだ歌が混じっていることだが、これは「歌群」をまとめて考える側からの見方であって、現実には多種類の桜の咲く期間は案外に長い。その間、すみれが咲き、山吹も咲き、藤も咲き出す。和歌の觀念の世界の論理でとらえれば、整序されていないのはその通りであるが、ある意味自然の推移によって配列されていると考えられないこともない。以上、後撰集の桜歌群についての考察の前提となるべきことを述べたが、後撰集の「花」については、注釈書(注3)を参考に私見で「桜」と判断した歌を対象に考察する。

次に拾遺集であるが、その成立は収載歌人の官職から、寛弘二年(一〇〇五)六月一九日から同四年(一〇〇七)正月二八日までとされている。この拾遺集の表現について、小町谷照彦氏は、三代集は古今集の表現の埒内にあるとした上で、もちろん古今集そのものではなく、「歌語の拡大、修辭の定着、趣向の開拓、感覺の洗練などという点において、『古今集』の集成的展開を遂げており、極端な言語遊戯的性格から脱却して、情と理がほどよく均衡し、優美平淡な歌風」であり、『拾遺集』は三代集の達成」と述べられている。(新大系『拾遺和歌集』解説)

一方、後拾遺集は、応徳三年（一〇八六）奏覽、翌寛治元年（一〇八七）再奏という。

すでに指摘されているように、後拾遺集初出の歌語や表現も多くあり、また同じ歌語でも質的な変化や用例増が認められ、前三代集から和歌史的な転換があるとされている。

これについて武田早苗氏は『後拾遺集』は、三代集に所収された歌材でも、さほどの注目を浴びなかった表現との取り合わせのものを積極的に掬い取るうとする^{注4}とし、また中周子氏は『後拾遺集』は『拾遺集』を継承発展させるという方針を持った集^{注5}と結論づけられている。これらの先行研究の指摘する各集の性格を念頭に置き考察を進めたい。

研究方法であるが、まず対象となる部立てとしては、四季の部の春のみに限り、恋、賀、雑といった他の部立てでの「桜」の歌は扱わない（ただし、拾遺集については巻十六「雑春」も対象とする）。

和歌の抽出は、詞書、歌のどちらかに「桜（花）」の語を含む歌を対象とし、組み合わせられているいくつかの歌材、歌語を選び組み合わせごとに比較考察する。

また、古今集の「花」歌群であるが、既に述べたように「桜」に特徴的な取り合わせ（詠い方）で詠まれているものだけを取り上げるが、これはどの「花」が桜を歌うのかを認定することが主眼なのではなく、個別具体的な花を超えた、概念としての「花」を考えるためである。従って桜を思わせる「花」については、あえて「花」歌群内に分類することで、「桜」の詠い方とは異なる点があるかにも注目しつつ言及していきたい。

二 桜の享受——「折る」「つと」「花見」

以下「桜」の歌を他の歌材とともに分析する前に、歌の対象となる桜の様相や、どのような時にどう扱われ、詠わ

れたのかを考えたい。

植物誌、社会学の見地からの研究^(注6)によればこのころの山桜は、現在の固有の種としてのヤマザクラのみに留まらず、山野に咲く野生の桜全てを意味した。自然交配で種々の桜が生まれ、全国に自生していたわけであるが、当時の歴史、文化の中心であった近畿地方に多く自生する植物であったため、古くから賞美の対象とされてきたという。古代貴族の庭園に咲く桜もおそらくこの野生の桜を移したものである。従って、色も、咲く時期も違う桜があるのがごく当たり前であった。「桜」の享受については、既に山田孝雄『櫻史』^(注7)において、「中古の巻」では「花の宴」、「櫻会」、「花見」、「櫻狩り」、「花の折枝」、「花合」と項目をあげ、詩歌、説話集、歴史書などの文献を引いて述べられている。

勅撰四集においても、この山の桜を享受する姿は、さまざまに歌われる「折る」行為から窺い知れる。すなわち人に桜を贈る、または身近な瓶に挿して^(注8)手元で楽しみ、また一方で実際に花の咲く所に出かけて見る「花見」「櫻狩り」が行われたことがわかる。

二一 折る

まず、「折る」であるが、「折る」が詠み込まれている歌は古今集に六首（54、55、58、64、65、80）、後撰集に七首（50、51、52、68、77、93、115）、拾遺集に二首（1039、1040）、後拾遺集に四首（84、85、89、92）ある。

このうち古今集の54、55番歌は、見に来ていない人に折って土産に持ち帰り見せよう、64、65番歌は、散る前に折って賞美するか、折るのは惜しいので散るまで見届けよう、と「折る」ことに逡巡する気持ちを歌っている。各一首ずつ以下にあげる。

山の桜を見て、よめる

素性法師

55 見てのみや人に語らむさくら花手ごとにおりて家づとにせん

題しらず

よみ人しらず

64 散りぬれば恋ふれどしるしなき物をけふこそ桜おらばおりてめ

この四首において「折る」行為は実は行われていない。桜を見て「折る」行為を想像して詠んでいるのであり、あるいは、「桜||折る」がひとつの美的行為として認識されていたのかもしれない。この四首の場合「折る」行為は歌の中で完結しているわけで、実際に折った桜を人に贈るなどはしていない。古今集において、具体的に「折る」桜が詠まれるのは次の二首である。

折れる桜を、よめる

貫之

58 誰しかも尋めておりつる春霞立かくす覧山のさくらを

心地損なひて、患ひける時に、風に当たらじとて、下し込めてのみ侍ける間に、

折れる桜の散り方になれりけるを見て、よめる 藤原因香朝臣

80 たれこめてはるのゆくゑも知らぬまにまちし桜もうつろひにけり

この二首は折られて室内にあると思われる桜を詠んだものである。この場合は、第三者の行為による「折れる桜」が手元であり、それに対しての詠者の感興が詠まれている。ただ詞書でわかるように第三者は登場しない。「桜」は詠者の感慨に留まっている。この「折る」の語は、古今集春下の「散る桜」歌群にはなく、「花」歌群にもない。

続く後撰集では、「折る」については、詞書において具体的な状況が語られており、桜が人間関係の中で、歌を贈答するひとつのよすがになっていることが窺い知れる。

まず、花見の宴の折の歌として次の歌がある。

花山にて、道俗、酒らたうべけるおりに
素性法師

50 山守はいはばいは南高砂の尾上の桜折てかぎむ

古今集55番歌と同じ素性の歌であるが、ここでは人々が桜を折ってかぎして「花見」に酔いしれて楽しむ人々を詠んでおり、古今集との表現の違いが明らかである。

後撰集の他の歌は「おもしろき桜を折りて」(51、52)「その花おもしろかなりとて折りにつかはず」(68)「桜の花のおもしろかりけるを折りて」(93)など、折って桜の美を共有できる具体的な相手が居る「折る」である。従って歌は個人の述懐に留まらず、桜を贈った相手に伝える気持を詠んだものとなっている。

おもしろき桜を折りて、ともだちのつかはしたりければ
よみ人しらず

51 桜花色はひとしき枝なれどかたみに見ればなぐさまなくに

返し
伊勢

52 見ぬ人のかたみがてらはおらざりき身になずらへる花にしあらねば

つねに消息つかはしける女ともだちのもとより、桜の花のおもしろかりけるを折りて「これ、その花に見比べよ」とありければ
こわかきみ

93 わがやどの歎は春も知らなくに何にか花を比べても見む

後撰集の「折る」は、具体的に桜を折る行為を伴って、贈り贈られているわけで、古今集とは明らかに違うことがわかる。

拾遺集は「春部」ではなく、卷十六「雑春」に次の二首がある。

桜の花咲きて侍ける所に、もろどもに侍ける人の、後の春ほかに侍けるに、その花を折りて遣はしける

よみ人しらず

1039 もろどもにおりし春のみ恋ひしくて一人見まうき花盛り哉

御厨子所にさぶらひけるに、蔵人所の男ども、桜の花を遣はしければ

壬生忠見

1040 もろどもに我し折らねば桜花思やりてや春は暮らさん

前者は、述懐であるが、後者は我が身の不遇を嘆いた歌（新大系脚注による）である。古今集の詠風を引き継いでいるといわれる拾遺集であるが、「春」部に「桜を折る」歌がないのは、屏風歌や歌合の歌になかったのか、あるいは意図して外したのか、不明である。

後拾遺集は「春」四首の「折る」歌のうち、次の89番歌は「いづれをかわきてくまし」というパターンで後世でもさまざまに詠まれることになった。

題不知

祭主輔親

89 いづれをかわきて折らまし山桜心うつらぬ枝しなれば

また、92番歌は「折る」に「居る」を掛けた例で、折る行為そのものを歌うのではないが、山桜を「折る」ことが、都への恋しさと都にいない物憂さをよびおこしている。

長楽寺に侍りけるころ、齋院より山里の桜はいかゞとありければ、よみ侍ける

上東門院中将

92 にほふらん花のみやこのこひしくてをるにものうき山桜かな

桜を「折る」ことは、古今集においては、前述したように一つの美的な行為（美意識）と捉えることができ、後撰集においては人間関係の中での具体的な行為として詠われる。拾遺集、後拾遺集においては、数の上では減少する。ただし、実際に「折る」行為がなくなつたわけではない。それは後拾遺集の次の歌でもわかる。

一条院御時、殿上の人々花見にまかりて、女のもとにつかはしける

源雅通朝臣

84 折らばをし折らではいかゞ山桜けふをすぐさず君にみすべき

返し

盛少将

85 おらでたゞ語りに語れ山桜風に散るだにをしきにほひを

これは、次に考察する「花見」の歌の範疇にもなるわけであるが、花見の時には当然のように「折る」行為が伴うことになる。桜を享受するための「折る」は引き続きであつたはずで、それはある意味日常的に、桜の季節には「折る」行為が行われ、多くの歌が交わされたに違いなく、その歌は日常的である故に、集としては撰歌されなかつたのであろう。

二二二 花見

次に「花見」について各集を見ると、詞書または歌に「花見」という語が含まれる歌は、古今集二首（67、95）後撰集三首（99、112、133）、拾遺集に一首（35桜とは特定できない）と大要少なく、後拾遺集に至つて十三首と頻出している（77、78、79、80、84、85、86、87、103、113、117、119、124）。（この場合の「花見」は一つの単語として考えられるものである。「花見れば」などの用例は含めない。）

古今集では、

桜の花の咲けりけるを見にまうで来たりける人に、よみて、贈りける 躬恒

67わがやどの花見がてらに来る人はちりなむのちぞ恋しかるべき

雲林院親王のもとに、花見に、北山のほどりにまかれりける時に、よめる

95いざけふは春の山辺にまじりなむ暮れなばなげの花の影かは

の歌がある。このほかに次の歌も『伊勢物語』八十二段(注)によれば、渚の院に毎年桜を見に出かけていたことがわかる。

渚院にて桜を見て、よめる

在原業平朝臣

53世中にたえてさくらのなかりせば春の心はのどけからまし

先にあげた後撰集50番歌も花見である。後撰集には、浮き立つ心を詠んだ次の歌がある。

女ども、花見むとて、野辺に出でて

典侍よるかの朝臣

112春来れば花見にと思心こそ野辺の霞とともにたちけれ

以上の歌における花見の折には、当然宴も行われていたと推察されるが、親しい仲の集まりを歌う後拾遺集の「花見」の歌では、いささか様相が変わってくる。

まず「花見」に招かれなかったことへの恨みごとの歌が四首(77、78、79、113)ある。

二月諾、良暹法師のもとに、ありやとおとづれて侍りければ、ひとくく具して花見になむ出でぬると聞きて、つねは誘ふものをも思てたづねて遣はしける

藤原孝善

77 春霞へだつる山のふもとまで思ひしらずもゆく心かな

人く、花見にまかりけるを、かくとも告げざりければ、遣はしける

藤原隆経朝臣

78 山ざくら見にゆく道をへだつれば人の心ぞかすみなりける

その他に103、117番歌に道明法師、能因法師の歌があるが、いずれも世の中のはなやかな花見とは無縁の心境を詠んでいる。

道命法師

103 花見にと人は山辺に入りはてて春は都ぞさびしかりける

以上は男性の歌であるが、次の三首は「おのこども」が花見に出かけて、自分に行かないが桜を思う気持ちは同じであるという86、87番歌と、自ら花見にでかけてその感興を詠んだ119番歌で、女性の歌である。一首のみ例にあげる。

後冷泉院御時、上のおのこども花見にまかりて、歌などよみて、高倉の一宮の御

方にもてまいりて侍りけるに

一宮駿河

86 思ひやる心ばかりは桜花たづぬる人におくれやはする

これまであげた後拾遺集の歌を見ると、「花見にまかる」つまり「わざわざ行く」という語が詞書に詠まれているのが十三首中八首ある。ということは、後拾遺集のころになると貴族社会では「花見」は、ある程度恒例化し年中行事のように行われていたのではないだろうか。「一条院の御時」(84)、「後冷泉院御時」(86)、「今上御時」(87)などを見ると、宮廷もこうした「花見」行事に関わっているのである。春霞に誘われ思い立って花見に出かける(後撰集

112) あるいは我がやどに客を招いて花見の宴をする(古今集67) という風に、たまたま思い立って行う行為ではなく、前々から計画が練られて集団で出かけるものである。だから誘われぬ恨み、孤独を詠うわけである。

そして、興味深いことに、後拾遺集の「花見」の歌は、80、84番歌を除いて、女房や北の方の歌を含む十一首までが、実は「花見」には行っていない歌である。男達は前述のように招待から外されたり、誘い合う世俗から離れた状況から詠んでいる。桜の美を享受し、花を賞美する歌ではなく、また古今集のように桜の美の共有といった観念もない。

これは、古今集から後拾遺集へと桜の歌が移り変わり、桜の捉え方がいかに変わったかを考えるとき、重要な観点となる。後拾遺集においては、「折って」賞美する、「花見」に行つて酔いしれるといった歌は選ばれていない。従来いわれている後拾遺集の和歌史的転換というものの一つの表れと捉えることができるのではないか。

次に「桜」と「霞」「風」「こころ」の組み合わせにおいて、さらに考察をしたい。

三 霞と風

まず、古今集と後撰集における「霞」から考察する。

古今集における「霞」は、集全体では二十五首あり、数例を除いてほぼ「春霞」、「春の霞」という詠まれ方である。このうち「春歌」部では十四首、「桜」(花)に関わる歌は「桜」歌群(51、58、69、79)、「花」歌群(91、94、102、103)の八首である。

古今集の「霞」と「桜」(花)の取り合わせは「霞は桜(花)を隠すもの」として「隠す」の語が含まれる歌が四首(51、58、79、94)あり、また意として「霞にこめて」(91)なども含まれる。この「花を隠す霞」の発想につい

て鈴木宏子氏は、「花を愛するひとにとつて」邪魔者である霞と花を組み合わせる〈花を隠す霞〉という型は、花を賞美し、愛惜する心の逆説的な表現としてあるのではないかと評している。^(注10)

「隠す」と共に詠まれる「霞」の歌には、51、79番のように確かに桜を隠された残念さが歌われている。

貫之

79 春霞なに隠す 覧さくら花ちる間をだにもみるべき物

これらの古今集の「霞」を含む歌を見ると、前述の「折る」項でも挙げた58番歌は、実際に折られた桜を見て、「霞」で隠された向こうの山に桜(花)があることを想像して詠まれている歌である。他の歌もほぼ同じで、見えない山の桜を賞美し、そして霞の色が変わるのは、花の色が映っているからか(69、102)と想像し、霞で花は見えないが花の香はする、あるいははしてほしい(91、103)(後述「風」の項)と、視覚、嗅覚で、受け止めて詠われている。「霞」は向こうの「桜(花)」を幻視させ、「桜(花)」と共にあることによつて、ただの気象現象にとどまらない、春の思いをかき立てるものとして生かされている。

一方、後撰集の「霞」は、集全体で十九首、うち春部で十二首、「桜(花)」に関わるのは七首(63、73、90、99、112、113、114)であり、「桜」の語が詠込まれているのは63番のみである。他の「花」と詠まれている歌については、詞書や詠歌状況(花見)などで、桜と推定される歌である。

題しらず

よみ人も

63 立渡る霞のみかは山高み見ゆる桜の色もひとつ

この歌では、霞の色と桜の色がひとつになってとけあっているという。霞は桜を隔てるものというより、桜と一体となって桜を超えた美(高い山を彩る霞)を形作っている。

次の歌は「雪」と「花」の見立てであるが、「(雲のような)霞を分ける」と「散る花が雪に見える」ということを一首に詠み込んでいる。

題しらず

よみ人しらず

90 山高み霞をわけて散る花を雪とやよその人は見るらん

63、90 番の二首は、春の叙景歌といつてよく、古今集の詠い方の表現を少し発展させたといえる。

この他の後撰集の「霞」と「桜(花)」の歌には、「花見」の99番、112番があり、この他おそらく桜の「花ざかり」の時の贈答歌が次の歌である。

あひ知れりける人のひさしうとはざりければ、花ざかりにつかはしける

よみ人しらず

113 我をこそとふにうからめ春霞花につけても立ち寄らぬ哉

返し

源清陰朝臣

114 立ち寄らぬ春の霞をたのまれよ花のあたりと見ればなるらん

この場合「春霞」は「霞」と「立つ」を「立ち寄る」にかけ、花を隠す霞をうまく利用して、無沙汰の言い訳をしている。

このように、後撰集では「隠す」という語を含む歌はない。ひとつ古今集の91番(花の色は霞にこめて見せずとも香をだにぬすめ春の山風)を本歌とする73番歌に「霞ぞほだし」という、隠す意をもつ語があるのみである。

寛平の御時、「花の色霞にこめて見せずといふ心をよみてたてまつれ」とおほせられければ

藤原興風

73 山風の花の香かどふ麓には春の霞ぞほだしなりける

この歌は「霞」が古今集51番「峰にもおにも」のような高い所ではなく「麓」で、山風を邪魔して香りを引き留めているというところで、古今集を継承し展開させた歌である。

以上にみるごとく、後撰集においては、「霞」が「桜(花)」を隠すという概念ではあまり詠われていないのである。

この古今集の「桜」歌群と「花」歌群の「桜」と「花」の扱いであるが、「霞」との取り合わせにおいては、「花」歌群の四首は「桜」と考えて良さそうである。それは、遠い山の霞の向こうの見えない花であるので、「桜」と言い切らず、「香」や、「色」などから「桜」であることを心に期待していて、詠まれた歌である。これは後撰集の霞の歌にも共通する表現である。

次に「風」をめぐる古今集・後撰集の歌を確認する。

古今集の、「桜(花)」と「風」を取り合わせた歌は、春歌下の76、83、85、86、87、89、91(「花」)、103(「花」)番の八首である。

「風」は自然現象であるが、「桜(花)」が散るのに関与するため、「風」を擬人化して、「風」に心をみる歌が四首ある(76、85、86、87)。二首のみあげる。

桜の花の散り侍けるを見て、よみける 素性法師

76 花ちらす風の宿りは誰かしる我にをしへし行てうらみむ

春宮帯刀陣にて、桜の花の散るを、よめる 藤原好風

85 春風は花のあたりをよきてふけ心づからやうつるふとみむ

これらの歌は、自由に気ままに吹く「風」に頼んで、「桜」の散るのを止めてもらおう、という発想である。85番は「桜」がみづからの心で散るのか確認したいという歌で、桜にも心を持たせている。この直前、84番の「久方のひかりのどけき春の日にしづ心なく花のちるらむ」（紀友則）のように、「風」に言及しなくとも、散り続ける桜を表現することはできる。しかしそこに「風」を組み合わせると、より散りざまが動的にイメージできる。86番は「雪とのみふる」桜にさらに「風」が吹くことで、いつそう桜の花びらがたくさん散り舞う姿が想像できる。

「桜（花）」と「風」は対立するものではない。「風」によって散る「桜」の姿が、いつそうに作者の感興を呼び起こし、歌を詠ませるのである。「風」に対して恨んでみせているが、実は「風」もなくてはならない存在である。

また、「風」は、次のように「香」を運ぶ役目もする。この発想は後撰集にもみられる。

春の歌とて、よめる

良岑宗貞

91 花の色は霞にこめて見せずとも香をだにぬすめ春の山風

在原元方

103 霞立春の山辺はとをけれど吹きくる風は花の香ぞする

後撰集の「風」と「桜（花）」の歌は53、56、57、64、85、88、91、105、106番の九首である。ここでも「風」の擬人化がみられる。

貞観御時、弓のわざつかうまつりけるに 河原左大臣

56 今日桜雫に我が身いぎ濡れむ香込めにさそふ風の来ぬ間に

家より、とをき所にまかる時、前裁の桜の花に結びつけ侍ける

菅原右大臣

57 さくら花主をわすれぬ物ならば吹き来む風に事づてはせよ

よみ人しらず

64 大空におほふ許の袖も哉春咲く花を風にまかせじ

このうち、56番は「香込めにさそふ風」、57番は花も風も擬人化されて「吹き来む風」に言づてを頼んでいるが、この二首の「風」の方向は反対である。すなわち「誘つて去つてゆく風」と、「吹き来む風」である。作者を左大臣、右大臣と並べたのは、この対称的な「風」の動きも意識しているのだろうか。

64番歌は、花を風から守るために、大空に花を覆うくらの袖があつたらという発想で、非現実的であることはわかっている。詠んでいるのだが、この「おほふばかりの袖」の表現は愛唱されて世に影響を与え、歌に詠まれたり、『源氏物語』にも引用されている。

また、伊勢の歌である次の歌は、根こそぎ桜の花をこちらの庭にもつてきてほしいという、大胆な役割を風に与えている。

朝忠朝臣となり侍けるに、桜のいたう散りければ言ひつかはしける 伊勢

85 垣越しに散り来る花を見るよりは根込めに風の吹も越さなん

次の贈答歌は敦忠と、亡くなった妻との間の子を養育する生家の人（女の母または乳母か）との応答である。

助信が母身まかりてのち、かの家に敦忠朝臣のまかりかよひけるに、桜の花の散

りける折にまかりて、木のもとに侍ければ、家の人の言ひ出しける

よみ人しらず

105 今よりは風にまかせむ桜花散るこのもとに君とまりけり

返し

あつたゞの朝臣

106 風にしも何かまかせん桜花匂あかぬに散るはうかりき

「桜花散る」は詞書により実際に桜の木があつたことがわかるので、その実際の桜が散つたことを歌うのであるが、当然「助信が母」が早世した意もあろう。それに対して後者はまだ「桜花」(妻)への思いを残しているのに、「風」に散らすにまかせることができないと詠んでいる。

後撰集の「風」は「花」を散らすものとの意は古今集と同じである。ただ、歌語的に56番歌のように道具立てが多い歌や、「おほふばかりの袖」、や「根込め」といった少し強い語を含む歌、また贈答歌であることによつて、古今集的な表現とはやや異質な歌が採られていることがわかる。

次に同様に拾遺集と後拾遺集の「霞」「風」との取り合わせを見てみよう。まず拾遺集の「霞」である。拾遺集の「霞」の歌は集全体で三十二首あり、「霞」と「桜」(花)の取り合わせは、四首(37、40、42、104)ある。

題知らず

37 吉野山絶えず霞のたなびくは人に知られぬ花やさくらん

この歌は「霞は花を隠すもの」という類型的な発想である。また1041番歌(雑春)は「霞立つ山」のあなたに在る女性を桜にたとえて詠んでいる。

菅家万葉集の中

40 浅緑野辺の霞は包めどもこぼれてにほふ花桜哉

この40番歌は『新撰万葉集』（管家万葉）の春3番の歌で、『寛平御時后宮歌合』にもある歌だが、山ではなく、「野辺の霞」が「花桜」を「包む」という表現、こぼれて「にほふ」は視覚的表現にも用いられるので、緑との対比で美しい風景を想像させる。

後拾遺集は、「霞」は集合体で二十三首で「桜（花）」との取り合わせは四首（66、77、78、120）である。このうち次の歌は、たなびく霞を見やるのではなく、「霞」立ち込める山里にいて、桜が花咲くのを待つという表現である。

長楽寺に住み侍りける、二月許に人のもとに言ひつかはしける 上東門院中将

66 思ひやれ霞こめたる山里の花まつほどの春のつれぐ

77番、78番は「花見」の項であげたように、花見に誘われなかった怨み言で、「霞」は古今集のように「花」を隔てるというより、人が自分を隔てるのによそえて使われている。

次の120番は高い峰に咲いている桜に対して、まわりの人里に近い山に霞は立たないでほしいという歌で、遠近と高低を感じさせる。

内大まうちぎの家にて、人く酒たうべて歌よみ侍けるに、遙かに山桜を望むといふ心をよめる

大江匡房

120 高砂の尾上の桜咲きにけり外山の霞たゞずもあらなん

以上両集の「霞」と「桜（花）」を取り合わせた歌をみてきたが、拾遺集の「霞」は古今集の優美さを引き継いでおり、後拾遺集では「霞」は「桜（花）」を隔てる前提は変わらないが、拾遺集、後拾遺集ともに「霞」と「桜（花）」を取り合わせる歌が大きく減っている。桜のどのような様子、あるいはどのような桜への思いを詠うのが変化し、撰歌の方向が変わったことを推察させるものである。

次に拾遺集、後拾遺集の「桜」と「風」の歌を確認する。

拾遺集の「風」の歌は39、62、64、66、1035、1053番の六首である。「桜」を咲かせる、散らすなどの「風」の典型的な詠い方が四首あり、この中で「風」の擬人化も三首みられる。66番「桜花散り残り」と風「知らるな」、1035番「春風は花のなき間に吹きはてね」、1053番「山桜飽かぬにほひを風にまかせて」である。ただ、いずれも新しい発想ではない。

次の62番の歌は荒れた宿の桜は惜しむ人がいないので桜は気軽に風に散るだろうと、「桜」にも心を持たせている歌である。

荒れはてて人も侍らざりける家に桜の咲き乱れて侍けるを見て 惠慶法師

62 浅茅原主なき宿の桜花心やすくや風に散るらん

この荒れはてた庭の桜を詠むのは、勅撰集前二集にはない。古今集68番に「見る人もなき山里のさくらばな」、後撰集68番「山里にちりなましかば桜花」など、「山里」が寂しい場所とされることはあるが、場所を示す詞書のある歌は「渚の院」、「雲林院」などである。この「主なき宿の荒れはてた庭」は、往時は人々が訪れる豪壮な邸宅であり、桜が愛されたに違いない。ところが主が亡くなり、人が去り荒れ果てたところに見る人もなく咲いている桜が「風」に吹かれて散る。「風」は詠者の心におそらく寂しさも伴った感興を呼び起こしたのであろう。

亭子院歌合に 貫之

64 桜散る木の下風は寒からで空に知られぬ雪を降りける

64番の「木の下風」という（新大系脚注には「貫之の造語か」とある）「風」は桜を散らせているのであるから、暖かい「風」である。「桜」が「雪」に見立てられて、「寒からぬ木の下風」に舞う雪が、空の知らぬ木の下と捉えて

みせたところに面白さがある。

後拾遺集の「風」と「桜」の取り合わせの歌は81、85、108、138、143、148番の五首である。後拾遺集になると81番、138番の「風」を「いとふ」「いとほし」、143番の「つらき」など148番「風だにも」と「風」と対立する表現が出てくる。(85番歌「折る」項)

題不知

永源法師

81 桜花咲かば散りなと思ふよりかねても風のいとはしきかな

隣花をよめる

坂上定成

138 桜散るとなりにいとふ春風は花なき宿ぞうれしかりける

永承五年六月五日、祐子内親王の家に歌合し侍けるによめる

大貳三位

143 吹く風ぞ思へばつらき桜花心と散れる春しなければ

庭に桜の多く散りて侍りければよめる

和泉式部

148 風だにも吹きはらはずは庭桜散るとも春のほどは見てまし

古今集では「風」は桜を散らすものであるものの、「桜」の散る心を試そうと呼び掛けるなどして対立的にとらえていたわけではないし、風に散りしきる桜の美しさも美意識のうちであった。だが、後拾遺集の「風」は「桜」を散らすものという前提は同じであるが、「桜」にとつては厭わしいものという意識が強まり、「桜」と「風」が対抗する関係にあることがわかる。それは、古今集では「風」を擬人化して、人間の心に寄り添い得るものとして扱われるのに対して、後拾遺集の「風」は人間とは違うものであり、詠者の心を投影し得るものではないのである。

四 心

「心」は具体的な事物ではないが、一つの「歌語」としてとらえ、「桜(花)」とともに詠まれている歌を考察する。「桜(花)」を詠う歌の中に見られる「心」の表現には、他人の「心」で第三者的に詠まれている「人の心」と、詠者自身の我が「心」がある。また、擬人化された「桜(花)」の「心」、「風」の「心」、「春の心」も見られる。

まず、古今集と後撰集の「心」を見てみる。

古今集の「心」を詠み込んだ歌は、61、82、83、84、85、87、96（「花」）、104（「花」）番に見られる。このうち「人の心」の言葉を直接詠んでいるのは、次の二首である。61番は見る人の心であるが、「飽かれやはせぬ」とは、つまるところ詠者も世の人も同じ気持ちということである。また、83番は「桜」との対比で「人の心」が詠まれており、この「心」は一般に世の人々の「心」で、散りやすい「桜の心」よりもうつろいやすい「人の心」だという。

弥生に閏月ありける年、よみける

伊勢

61 さくら花春くはゝれる年だにも人のこゝろは飽かれやはせぬ

桜のごと、疾く散る物はなしと、人の言ひければ、よめる

貫之

83 桜花とくちりぬとも思ほえず人の心ぞ風もふきあへぬ

「しづ心」が82、84番に見られる

桜の花の散りけるを、よみける

貫之

82 ことならばさかずやはあらぬさくら花見る我さへにしづ心なし

桜の花の散るを、よめる

紀友則

84 久方のひかりのどけき春の日にしづ心なく花のちるらむ

同じように「桜」を擬人化し、「桜」が「しづ心」なく散るさまを歌うが、82番は「我さへ」と、我が心も重ねている。84番も見ている我が心も「しづ心」ではないはずである。

次の二首は「風」の項でも取り上げた歌であるが、擬人化された「桜」の「心」と「風」の「心」である。

春宮帯刀陣にて、桜の花の散るを、よめる 藤原好風

85 春風は花のあたりをよきてふけ心づからやうつるふとみむ

比叡に登りて、帰りまうで来て、よめる 貫之

87 山たかみ見つゝわが来しさくら花風は心にかますべらなり

いずれも風が桜が散っているのが、85番は風ではなく桜自らの心で散っているのかみたいという歌であり、87番は風が意のままに散らしているのであろうと詠んでいる。「桜(花)の心」を「風の心」との関係を通じて測っているのである。実際は散ってほしくはないという「我が心」が根底にあり、詠者が自らの心情を擬人法によって無心の物に投影しているのである。

一方、後撰集には、69、74、88、92、102、112番に「心」が詠まれている。

「人の心」は69、102番で詠まれているが、このうち69番は68番の衛門の御息所の歌「山里に散りなましかば桜花にほふさかりも知られざらまし」への帝の返歌で、この場合の「人の心」は「うへて見るらん」衛門の御息所であり、この場合は特定の相手の心ということになる。

御返し

69 匂こき花の香もてぞ知られけるうへて見るらん人の心は

102番は古今集の83番(前掲)と同じ、移ろう人の心の意である。112番は霞とともに「心が立つ」と歌い、人々の花

見に浮き立つ心を具象的なイメージと共に表現している。

女ども、花見むとて、野辺に出でて

典侍よるかの朝臣

112 春来れば花見にと思心こそ野辺の霞とともにたちけれ

74番は、降ると経るをかけて、年取ってしまった我が心だが、でもやはり花は惜しく思うの意。92番は後撰集の「桜」歌では、唯一の擬人化された「心」（花の心）を歌うが、「花の心」ということば自体は勅撰集では後撰集が初出で、後撰集には「をみなへし」など五首の花の心が歌われている。「花の心」は好まれたらしく、貫之、躬恒なども詠んでいる。

題しらず

よみ人も

74 春雨の世にふりにたる心にも猶あたらしく花をこそ思へ

きよはらのふかやぶ

92 うちへて春はさばかりのどけきを花の心やなにいそぐらん

後撰集のうち、散る「桜（花）」に対しての人間の「心」を詠んだ歌は、古今集85番歌に対応している次の88番歌と、前掲の92番歌である。

貫之

88 風をだに待ちてぞ花の散りなまし心づからにうつるふがうき

古今集がほぼ散る「桜（花）」への心情を詠んでいるのにたいして、後撰集は特に特徴ある歌が見られない。「桜（花）」と「心」との関係性は余り重要なものではないのかもしれない。

次に拾遺集と後拾遺集を考察する。

拾遺集は後述する後拾遺集にくらべ「桜（花）」と「心」を読み込んだ例は多くはない。

平正文が家の歌合に

忠岑

43 春は猶我にて知りぬ花盛り心のどけき人はあらじな

題知らず

よみ人知らず

53 桜色に我が身は深く成ぬらん心にしめて花を惜しめば

題知らず

よみ人知らず

60 見もはてで行くと思へば散る花につけて心の空になる哉

荒れはてて人も侍らざりける家に桜の咲き乱れて侍けるを見て

恵慶法師

62 浅茅原主なき宿の桜花心やすくや風に散るらん

以上に見られるように、43番は満開の桜、他の三首は散る桜に対する愛惜である。これはやはり、古今集の「桜（花）」の優美なところが引き継がれている。62番歌は、散るのを惜しむ人もいない荒れた庭で桜の散っているのを見て、「桜の心」を気楽に、遠慮なく散っているのであると推察しているのだが、それはまた詠者の散る桜への哀惜の心である。

「心」の用法であるが、単に「心」あるいは「の心」の形、または「しづ心」のように「心」の上に形容表現をとまなう名詞形で詠う古今集や後撰集とは異なり、拾遺集では、「心」がどういう状態であるかを具体化するように、形容詞を用いていることが注目される。すなわち、「心のどけき」「心やすく」は無論のこと、「心にしめて」「心の空になる」のように詠者の心を詠むのである。

後拾遺集になると、77、78、86、87、89、90、91、94、97、104、112、133、140、145番と「心」を詠む用例が多い。まず、「人の心」であるが、「花見」「霞」の項で取り上げた78番のみである。

人々、花見にまかりけるを、かくとも告げざりければ、遣はしける

藤原隆経朝臣

78 山ざくら見にゆく道をへだつれば人の心ぞかすみなりける

また、「春の心」「水の心」「桜の心」(143番風の項)がそれぞれ一首ずつある。

通宗朝臣能登守にて侍りける時、国にて歌合し侍けるによめる 源縁法師

112 山ざくら白雲にのみまがへばや春の心のそらになる覧

家の桜の散りて水に流るゝをよめる 大江嘉言

145 こゝに来ぬ人も見よとて桜花水の心にまかせてぞやる

以上のほかは、ほぼわが「心」を詠んだ歌である。「思ひやる心」(86)、「あくがる心」(87)、「心のまゝに」(91)、「心は雲の上まで」(94)、「心をやりて」(97)、「心をくだく」(144)の表現がある。

題不知 祭主輔親

89 いづれかをわきて折らまし山桜心うつらぬ枝しなれば

菅原爲言

90 ゆきとまる所ぞ春はなかりける花に心のあかぬかぎりは

紫式部

104 世の中をなになげかまし山桜花見るほどの心なりせば

題不知

永源法師

141心からものをこそ思へ山桜たづねざりせば散るを見ましや

ここにあげた歌は、89番は「心うつる」ほどの枝も美しく心がひかれる意で新大系の注には「心が惹かれそこに心が乗り移る」とある。104番の「花見るほどの心」は、花をながめている時のような心であればという、同時代の和泉式部の歌に、「野辺に出でて花見る程の心にもつゆ忘れぬ物は世の中（世）」がある。90番、141番も「桜」に対して自らの心の動きを詠んでいる。

以上に見るように、後拾遺集の「心」の表現は、「心」を具体的な自らの行動を伴って詠んでいることに特徴がある。これは「桜」に詠まれる「心」を「歌語」として詠むことができた古今集、後撰集とはもはや違う詠じ方である。

また、この「心」と「桜」を詠んだ歌のうち、「山桜」が六首ある。これは、先に見たように、後拾遺集には「花見」の歌が多いことと関係づけられよう。

五 まとめ

勅撰集三代集と後拾遺集の「桜」の歌を、組み合わせられるいくつかの歌材、歌語により、歌を選び比較するといふ方法で「桜」の歌の詠風の変化を考察してきた。その結果、いくつかの興味深い点が認められた。

ひとつは、「桜」の歌の詠い方は、ほぼ百年余りの間であるが、決して一様ではないということである。桜の享受についても、人々はそれぞれの時代の捉え方で受け止め、歌を詠んだのである。それは、「桜」の歌の詠風に大きく影響しており、特に「心」との取り合わせで、顕著に見られた。

これは又、撰者の撰歌意識の違いにも関わる。拾遺集は古今集の詠風を引き継ぎながらも、少しずつ変化を見せているし、後拾遺集では「桜」歌の詠い方に大きな展開が見られた。これは、複数の撰者が選んで「桜」歌群を構成した、あるいは時間とともに桜の諸相を追った勅撰二集とは、公任、花山院、および通俊の撰歌意識は大きく異なっており、それぞれの集の「桜」歌をも少なからず特徴あるものにしていよう。

また、和歌史という観点からは、「桜」はどの歌材、歌語の組み合わせでも、後拾遺集において新しい詠風の変化が見られたことであり、従来、後拾遺集の性格としていわれてきた特徴が「桜」という歌材を通して確認できた。

以上「桜」の歌について、全く配列などを無視してかなり思い切った方法で分析を試みたわけであるが、ありふれた「桜」という歌材が、それぞれの時代に特徴的な詠み方で詠い継がれてきたことが窺い知れる。詠風の変化とともに詠みつがれてゆくのも、常に人々の感興を呼び起こすことのできる、「桜」の持っている「力」なのである。

- 注1 「古今和歌集全評釈」竹岡正夫著（右文書院 一九九六）、「窪田空穂全集第二十卷 古今和歌集評釈 Ⅰ」窪田空穂著（角川書店 一九六五）、「古今和歌集 全評釈（上）」片桐洋一著（講談社 一九九八）
- 注2 「後撰和歌集研究」杉谷寿郎著（笠間書房 一九九二）、「後撰和歌集の研究」佐藤高明著（日本学術振興会 一九七〇）
- 注3 「後撰和歌集全釈」木船重昭著（笠間書院 一九八八）、「後撰和歌集」工藤重矩著（和泉書院 一九九二）
- 注4 「後拾遺集」の撰歌意識と歌群構成の「方法」（相模国文27号 平成12年3月）
- 注5 「後拾遺和歌集」における「拾遺和歌集」の継承―共通する歌人詠の比較を中心に―（大阪樟蔭大学研究紀要第四卷 二〇一四）
- 注6 「和歌植物表現辞典」（平田喜信・身崎壽著 東京堂書店 一九九八）「日本人とサクラ―新しい、自然美を求めて」（斎藤正二著作撰集5）（八坂書房 二〇〇二）、「桜が創った『日本』―ソメイヨシノ起源への旅」佐藤俊樹著（岩波書店 二〇〇五）
- 注7 「櫻史」山田孝雄著（講談社 一九九〇）
- 注8 『枕草子』第三段「正月一日に」、第二段「清涼殿の丑寅の隅」（新編日本古典文学全集18 小学館 一九九七）、『古今和歌集』52番、『後撰和歌集』82、83番歌

注9 「竹取物語・伊勢物語・大和物語」(日本古典文学大系9 岩波書店 一九五七)

注10 「古今和歌集表現論」鈴木宏子著(笠間書院 二〇〇〇)

注11 「源氏物語」幻卷「おほふばかりの袖求めけん人よりは、いとかしこう思し寄りたまへりかし」(新全集 源氏物語4 p.29)

注12 「和泉式部集・和泉式部続集」清水文雄校注 岩波書店 一九八三)

(東京女子大学大学院博士後期課程人間科学研究科在籍)

キーワード

古今和歌集、後撰和歌集、拾遺和歌集、後拾遺和歌集、桜、霞、風、花見